

① 次の各文の——をつけた漢字の読みがなを書け。

- (1) 記録に挑んで懸命に泳ぐ選手に声援を送る。
 (2) 図書館で地域の産業に関する資料を閲覧する。
 (3) 日食を観測しようと、周到な準備をして待つ。
 (4) 我が家に滞在した留学生から丁寧な礼状が届く。
 (5) 垣根の向こうから、朗らかな話し声が聞こえてくる。

② 次の各文の——をつけたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) 浜辺でオサナイ妹と、美しい貝殻を拾う。
 (2) 次の停車場をツげる放送が車内に流れる。
 (3) ジシヤクで方位を確認しながら、山道を下る。
 (4) 大きな客船が、世界各地を巡るコウカイに旅立つ。
 (5) キュウユを終えた飛行機が、ゆっくりと滑走路に向かう。

③ 次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。

裕之と晃は、中学校の二年生である。裕之は、晃の所属するブラバンド部の部長をしていたが、コンクールを前に突然退部してしまい、部員たちから身勝手だと思われていた。晃は裕之の家に昆虫の標本を見に行ったとき、裕之が、病気で入院中の母親を毎日のように見舞っていることを知る。

木枯らしが、歩道の落ち葉を舞い上げる。

ブラバンドのコンクールは、神奈川県各地区予選で落ちてしまった。むだな努力かも知れなかったけれど、練習しているあいだは、みんなの心が一つにとけあっていた。コンクールの予選に落ちた時は、みんな抱きあって泣いた。

市の公会堂で行われた地区予選の帰り、晃はバス停を降りた時、向かい側の歩道からスーパーパーの紙袋を大切そうに抱えて、横断歩道を渡ってくる裕之の姿を見かけた。

「買物？ 大変だね。」
 「そうじゃないんだ。袋の中にフラスズメが入っているんだよ。」
 「スズメ？」

「スズメガの仲間さ。松林なんかでよく見かけるんだけど、成虫のまままで越冬するんだ。きょう、市立病院へ行った帰り、ツツジの植え込みで、羽をふるわせているのを見かけたんだよ。車や人がしょつ中通る場所だったし、放つとけば、踏みつぶされるか寒さで凍え死んでしまう。かわいそうでさ。」
 「どっちみち殺して標本にするんだろう。」
 「逃がしてやる。」
 「珍しい種類じゃないから。」
 「ちがう、ちがうんだ。ぼくには殺せないよ。」

(1) 裕之は、何かに怒りをぶつけるように激しい口調で言った。
 「見ろよ、ほら。」

裕之は、紙袋からガを取り出すと、てのひらにのせた。羽の長さが七・八センチほどもある大きなガだった。

「手の温かみで羽をふるわせてる。こいつを殺せると思うか。」

裕之は、てのひらにのせたガの羽の先端をつまんで、そつと広げてみせた。前翅は、地味な枯れ葉色をしていたが、後翅には、鮮やかな水色の斑紋がついていた。

「お前つて変わってるよ。」

学校にいる時の彼は仮の姿で、いま、てのひらにのせてガを温めてやっている裕之がほんとうの彼なのだろうか。

「分かってるさ。今は、自分のことで頭がいっぱいなんだ。」と裕之が言った。

「僕のことをだれが何と言おうとかまうもんか。僕は、大学の医学部を出て医師になりたいんだ。」

裕之は、フクラスズメを紙袋にそつともどすと、

「いっしょに来てくれないか。八王子神社の森まで。」と、梟をさそつた。

「フクラスズメの宿を見つけてやらなくちゃいけないんだよ。」

(2) 裕之の顔があまりに真剣だったので、梟も思わず、うんと答えていた。

町はずれの枯れ田が広がっている辺りに、八王子神社の森があった。

裕之は、直径が一メートルほどもあるクスノキの根元の洞になった土の上にガを置くと、柔らかな土を木の根元に寄せて、外から風の吹き込むのを防いでやった。

「ここなら鳥にも見つからないし、ノネズミにも食われないだろう。寒い冬が去って、また春になったら冬眠からさめる。生きていくれ。きつと生きているんだぞ。」

(3) 裕之は、何か目に見えないものに必死にとりすがるように、両手を合わせた。しばらくして、低い声でつぶやくように言った。

「僕はきょう、フクラスズメを見つけた時、放っておいても、野生のものだ、きつと生きていくと思った。生きていくなんて簡単なことさと思つた。その時、モズが鳴いたんだ。そのままおいていたら、モズの餌食えじきになってしまふ。僕はあわてて、フクラスズメを拾い上げたんだ。うまく言えないけど、生きていくためには人の助けがいる時がある。助けがほしい時がある……。」

(4) 裕之は、振り返って、きらきらする眼差まなざししで梟を見た。

「母のことだけど、聞いてくれる。」

裕之は、しばらく言葉の切つてから、平静な口調で続けた。

「ガンで入院してるんだ。」

裕之は、必死で自分を抑えている。しばらくして、何か目に見えない力に立ち向かうかのように拳こぶしを固めて言った。

「だめだと思ふかい。……そんなこと聞いたつて答えられないよな……。僕は、助かる道はあると思ふんだ。きつと助かる道はある。あんなに優しい母さんが、死んでたまるか。僕が医者になるまで生きていてほしい。どんなことをしても、僕は、この手で母さんの病気を治したいんだ。」

(5) 裕之は、口もとを固く結んで、木立ちの向こうに広がる遠くの空をみつめた。

西風がうなりを立てて吹き過ぎていった。

これから、きびしい冬が来る。

(大野哲郎「フクラスズメ」による)

(注) 前翅ぜんし——前にある羽。

〔問1〕 (1) 裕之は、何かに怒りをぶつけるように激しい口調で言った。とあるが、この表現について述べたものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア ガを救おうとする真意が梟に伝わらず、心の高ぶりを抑えかねて声を荒らげている裕之の様子を、たとえを用いて表現している。

イ ガを標本にするようしきりに勧める梟に腹を立て、大きな声を出してなじっている裕之の様子を、ありのままに表現している。

ウ ガの標本作りに飽きてしまったのだろうと梟に誤解され、あわてて反論している裕之の様子を、細部まで鮮やかに表現している。

エ フクラスズメはありふれたガであることを梟に分からせよう

と、熱っぽく話し続ける裕之の様子を、誇張して表現している。
〔問2〕 ② 裕之の顔があまりに真剣だったので、晃も思わず、うんと答えていた。とあるが、この表現から読み取れる晃の様子として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア ひたむきに医師を目指す裕之の心情に深く共感し、何とか手助けをしようとすぐさま誘いに応じている様子。

イ 強く誘われもしないのに、熱心な裕之の表情を見て自分もがの宿を探してやろうとひそかに心を決めている様子。

ウ 裕之の思いつめた表情について引き込まれ、よくわけも分らないままに同行することを承知している様子。

エ 裕之の強引な誘いとうんざりしながらも、それを悟られないようにとりあえずいっしょに行くそぶりを見せている様子。

〔問3〕 ③ 裕之は、何か目に見えないものに必死にとりすがるように、両手を合わせた。とあるが、このときの裕之の気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア 懸命に生きていく運命にあることを思い、深い哀惜の念にかられている。

イ もししが死ねば十分な心配りもしなかった自分自身を責めることになるのを恐れ、早く暖かい季節になるよう心から祈っている。

ウ 野生の力が強い生命力によって生き残ることを確信し、少しでも早く無事な姿を見たくて再会するときを心の奥底で待ち望んでいる。

エ できるかぎりのことはしたものの不安はぬぐえず、かけがえない命が何とか失われずにいてほしいと切ないほどに願っている。

〔問4〕 ④ 裕之は、振り返って、きらきらする眼差^{まなざ}しで晃を見た。と

あるが、裕之が「振り返って、きらきらする眼差^{まなざ}しで晃を見た」わけとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 入院中の母に対する不安を分かち合ってくれようとする晃の真心に感動し、どうしても感謝の気持ちを伝えたいから。

イ 病気の母を気づかう思いが抑えきれないほどに募り、せめて晃にだけは自分の気持ちを聞いてもらいたいと思ったから。

ウ 母親の入院を知っても病状をたずねようともしない晃の冷淡さを恨めしく思い、本当の気持ちを確かめたかったから。

エ 母親が病気なのになすすべもなく涙をこらえるだけの自分を、晃はふがいないと思っではないかと心配になったから。

〔問5〕 ⑤ 裕之は、口もとを固く結んで、木立ちの向こうに広がる遠くの空をみつめた。とあるが、このときあなたが晃の立場で、裕之を励ますために話しかけるとしたらどう話すか。この場面にふさわしい内容や話し方になるようにあなたの話す言葉を考え、その言葉を四十五字以内で書け。なお、や・やなどもそれぞれ字数に数えよ。

④ 次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。

森林に対する関心が急速に高まった中で、特に目立つのはブナ林に寄せられた多くの賛辞である。最近、世界の自然遺産に登録された白神山地がそのことを象徴している。しかし、ブナ林それ自体を称賛しているようにみえながら、実は人間を中心に置いた価値判断に終始していることをまず指摘しておかねばならない。もちろん人間あつての文明であり文化であるから、そのこと自体が必ずしも間違っているとは言えない。しかし、現在の自然界では、人間は既に生態系の一員から離脱している。したがって、人間の判断が、自然界全体にとっても望ましいものという保証はない。もっと具体的に言えば、人間が自分自身にとっての有用性のみを、絶えず判断の基

準としている点に問題があるにちがいない。この有用性という基準こそ、もう一度見直してみることが必要であろう。

初め、ブナ林への関心は、深い森への畏れの思いとともに、木材資源という視点から出発したものとされる。言うまでもなく、有形の効用はだれの目にも明らかだから、これを判断の基準にしたことは当然と言ってよい。次いで注目され始めたのは、森林のもついわゆる公益的機能である。この機能は極めて広範囲にわたり、しかも多様なので、ここに列挙することは避けた。ただ公益的機能の重視によって、森林一般と同様に、ブナ林にもまた新しい視点からの価値が認められるようになったことは確かである。

価値判断の基準はその後ますます多様になった。殊にレクリエーション機能などは、ブナ林の魅力を急速に増大させたと言える。ブナ林内の快適さや、ブナ林のもつ神秘さがここで意識されるようになった。さらに、従来なかったものとして注目され始めたのは、森林の文化的機能である。生態系としてのブナ林の価値も、この文化的視点から主として論じられている。ブナ林への期待は現在さらに高まっている。

(1) しかし、このように判断の基準が変わっても、初めに述べたように、あくまで人間にとつての有用性が念頭にあったことには変わりはない。しかも、その有用性の背景には、絶えず経済的な判断があった。森林の隠れた機能が次々と発掘され、そのつど人々は新鮮な驚きを覚えたものであるが、せじつめればいつも経済的な視点にたどり着くのである。例えば、林業経営というものの呪縛から、人々は逃れることができずにいるのではなからうか。我が国でも、まるでその証拠でもあるかのように、森林の効用を金額に換算しようという試みまでなされているのである。しかも、それが一般の人々の理解を助けていることも否定できない。

われわれは、一度人間中心の観点からみた場合の有用性というも

のから脱却しなければならぬ。そうすれば、これまで自然や森林の価値と考えられてきたものが、新たな視点から見直されることになるであろう。その場合、価値という表現は適切でないかもしれない。(2) おそらく自然や森林の価値ではなく、意義とでも表現すべきものであろう。ブナ林に注目が集まった現在、日本人はこの問題にいやおうなく対面させられたのである。例えば白神山地がなぜ保護される必要があるのか。おそらくそれは存在すること自体に、人知を超えた意義があると考えられるからであろう。だれのために、どう役立つか、などということが問題なのではない。この機会にもう一度自然というものの本質に迫ってみることが、日本人ばかりでなく、人類全体にとって必要とされているのである。

ブナ林との共存といっても、それはむしろ言葉のあやのようなもので、むしろ人間という立場からの発言であり提言であった。既に人間は生態系から離脱しているとはいえず、自分自身の立場をいままざら捨てることはできない。もしそれが可能なら、ブナ林の保全や自然保護の問題も、解決に悩むことはなからう。人間を生態系の一員として、他のもろもろの存在と同列に取り扱えばよいのである。そうすれば、真つ先に淘汰されるのはあるいは人間であるかもしれない。しかし、それが不可能なことはいまさら述べるまでもないであろう。ではどうすればよいか。

それには、人間を自然の支配者と位置付けた西欧の思想から、一日も早く脱却することが必要であろう。(3) 日本人にとって、これは必ずしも至難のことではない。もともと日本人の自然観は、自然を支配の対象とするどころか、自分自身とは別のもの、すなわち他者とはみていなかったのである。一言で言えばこれは自然との一体感、しかも親和的一体感となるであろう。西欧の科学思想の導入によって、日本人は科学に目覚めると同時に、この一体感を喪失した。この失った一体感を取り戻すことが、日本人にとっては今や急務なの

である。

では一体感とは何か。明治以前の日本人が自然を認識の対象にすらせず、そのため自然に相当する名詞すらもたなかった、というような説明だけではとうてい理解されない。おそらく本来の一体感とは、常に自然の側に立って、自然の気持ちを思いやることであるにちがいない。最近「自然にやさしく」とか「地球にやさしく」とかいう表現が、好んで用いられる。生態系から離脱した者が、自然を外から眺めて言う言葉としては、いかにもふさわしいように思える。しかしよく考えてみると、人間は常に自然に対して優者の立場にある。そういえば、「自然保護」という言葉もまた同様な語感を伴っているのではないか。まるで強者が弱者を保護するかのようであるが、むしろ保護されているのは人間であらう。(4) そのことを忘れて自然を保護すると言ひ、自然との共存を称^たえても、自然の側からみれば「いまさら何だ。」ということにもなりかねない。

大切なことは、人間にとって有用なものにだけ目を向け、その活用が自然と人間の関係のすべてだと思ふ考え方を捨てることであらう。そうならば、人間は自然の存在自体を尊重するしかない。自然の意志、ないし自然の心を尊重すると言つてもいいであらう。とはいへ、自然の心に迫ることなど、表現することは易しくても実際は至難のわざである。人間にできることは、自然に対して謙虚な気持ちをもつことにほかならない。せめて意識の中だけでも、生態系の一員である自分を自覚することなのである。

(北村昌美「ブナの森と生きる」による)

〔注〕 生態系——一定の空間に生育する生物群と、それらの生育にか

かわる要因の複合的な体系。

呪縛——心理的な制約。

淘汰される——適当でないものとして除かれる。

〔問1〕

(1) しかし、このように判断の基準が変わっても、初めに述べたように、あくまで人間にとっての有用性が念頭にあったことには変わりはない。とあるが、筆者が「判断の基準」の例として挙げているものを、本文中に述べられている順に次のようにまとめてみた。(a)と(b)にそれぞれ当てはまる語句を本文中からそのまま抜き出して書け。

有形の効用 ⇓ (a) ⇓ (b) ⇓ 文化的機能

〔問2〕 (2) おそらく自然や森林の価値ではなく、意義とでも表現すべきものであらう。とあるが、筆者がこのように述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 自然の本質に迫る深い内容を含む「価値」よりも、林業経営の基盤となる考えを具体的に表す「意義」の方が適切な表現だと考えたから。

イ 人間の知識では理解しがたい「価値」よりも、森林の効用についての人々の理解を助けてきた「意義」の方が適切な表現だと考えたから。

ウ 人間にとって有益かどうかを基準にした「価値」よりも、存在すること自体の意味に着目した「意義」の方が適切な表現だと考えたから。

エ 人間中心の観点を捨て去らなければならない「価値」よりも、経済的視点から簡単に分かる「意義」の方が適切な表現だと考えたから。

〔問3〕 (3) 日本人にとって、これは必ずしも至難のことではない。とあるが、「日本人にとって、これは必ずしも至難のことではない」とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 日本人は元来自然との一体感をもっているため、自然を支配するということ考えからどうしても抜け出せないわけではないということ。

イ 自然に対して強い愛着をもっている日本人が自然を支配しよ

うとする考えにこだわり続けるのは、やむを得ない面もあるということ。

ウ 自然の利点を十分に知る日本人は西欧思想の限界を理解しているので、従来の考えを捨て去ることは極めて容易であるということ。

エ 自然との親和的一体感を守り続ける日本人には西欧の思想が定着していないので、特に考えを改めようとする必要もないということ。

〔問4〕 (4) そのことを忘れて自然を保護すると言ひ、自然との共存を称^{ただ}えても、自然の側からみれば「いまさら何だ。」ということにもなりかねない。とあるが、「そのこと」に相当する内容として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 自然保護という言葉には特別な語感があるということ。

イ 保護されているのは自然ではなく人間であるということ。

ウ 自然の中では常に強者が弱者を保護しているということ。

エ 人間はいつも自然に対して優者の立場にあるということ。

〔問5〕 「自然と人間とのかかわり方」という題で、あなたの考えたことを、この文章で読んだことを参考にして二百字以内にとめて書け。なお、題は書かないこととし、書き出しや改行の際の空欄、や、や「なども、それぞれ字数に数えよ。

5 次の文章は「平家物語」について述べた文章で、文章中に引用されているAとBは、「平家物語」の原文である。あとの□の中のaとbは、原文AとBのそれぞれの現代語訳である。これらの文章を読んで、あとの各問に答えよ。

A 祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響きあり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰のことわりをあらはす。おごれる人も久しから

ず、ただ春の夜の夢のごとし。たけき者もつひにはほろびぬ、(1) ひとへに風の前の塵に同じ。

日本古典の中でも殊にすぐれたこの文章があまりに名文だものだから、『平家物語』というのは「盛者必衰」、盛んな者も必ず衰えるという「諸行無常」の無常観を語っている物語だと、読む前から、あるいは読まないまままで思っている人が多いのではないかという気がします。が、私はそうではないと考える。『平家物語』には二つのテーマがあると考えるのです。

一つはむろん、今いった「諸行無常」、強い者もいずれば滅び、人間は誰でも死んで行くものだというテーマで、このことは今日のわれわれにも当てはまる。殊にあの当時は戦いが至るところにあつて、民衆も武士もいつ殺されるかわからないという時代だったのだから、今日のわれわれが考える以上に「盛者必衰」の無常観は、大変悲惨な現実として皆に感じられていたでしょう。そしてそういう悲惨な現実に裏付けられた無常観は、『平家物語』の全体を通してのテーマ、いわば通奏低音であるといつていいと思います。

しかし『平家物語』の全体は、決してただそういうものではありません。それは、さつき引いた冒頭の名文のすぐ次のくだりからもはっきりします。(2) あの名文にすぐ続いて内外の無常の実例が挙げられるのですが、しかしそれらは、これから『平家物語』の中心人物としてその実体を論じようとする平家の棟梁、巨大な平清盛という人物像をもつばらクロスアップするための材料なのです。

すなわちまず、「遠く異朝をとぶらへば」として外国(中国)の、結局は亡じた四人の権臣、次に「近く本朝をうかがふに」として将門以下の日本の、結局は滅んだ四人の巨魁のただ名前を挙げ、以上をマクラに振っておいて、これらの者どもにしても、

B おごれる心もたけき事も、皆とりどりにこそありしかども、

まちかくは、六波羅の入道前太政大臣平朝臣清盛公と申し
人のありさま、伝へ承るこそ心も詞も及ばれぬ。

(3) その巨人の実体をこれからつぶさに書いてやるぞ、と、ここで
作者はあたかも宣言しているかのようです。

それを一般化していうと、確かにどんな人だって死ぬ。それが人
の世のさだめである。だが、そのさだめを前にして、いろんな人が
いろんな生き方をした。歴史の上に名をとどめているほどの人びと
は、とにかくみな全力を尽くして生きたのだ。その生き方が、ある
人の場合は無理な、我儘な、(4) 良くないものであったかも知れぬ。
またある人の場合には正しく、美しく、見事なものであったかも知れ
ぬ。またある人の場合には……。

いずれにせよ、人はどうせ死んで行くはかないものであるには違
いないが、しかし良いにせよ悪いにせよ、必死に生きたそういう
人々の生き方を、また、そういう生き方からまりあつてつくりだ
された歴史というものを、私たちはよく見とどけてみようではない
か。それを描こう、という表明が、この序章の持つもう一つのテー
マだと私は思うのです。そしてそのような二つのテーマが、この僅
か四百字詰め原稿紙一枚半にも充たぬ一節の中に鮮やかに描かれて
いる。そして『諸行無常』のテーマは、時としていま一つのテー
マの轟音に消されながら、しかし決して消えぬ強靱な通奏低音として
常に響き続けているとわいていいのでしよう。

『平家物語』をこういう作品だと思って読んで行くと、私たちに
いろんなことが見えて分かってくるようです。人間が生きて行く上
で何が良いことか悪いことか、また人間にとって真実とは何なのか
という、生きて行くことの難しさも面白さも大切さも分かってくる
ようです。そして、どうせ死ぬんだからいいかげんに日を送ろう、
ではなくて、人間一度は死ぬのだからこそ、生きている日々を充実
させて全力で生きてみよう、と考えるようになるでしょう。

(5) もちろん『平家物語』の読み方には、いろんな角度があるはず
です。それはどんな古典だつてそうですが、今いった視角から『平
家物語』を読んでみると、実におもしろい、劇的といつていいいろ
んな人物像が、生き生きとわれわれの前に浮かび上がつて来ます。

(木下順二「劇的」とはによる)

(注) 通奏低音——曲の演奏中、和音を補いながらかなでられる低音
の旋律。

棟梁——統率者。

クロスアップする——大きく取り上げる。

とぶらへば——たずねると。

権臣——権力をもつ家臣。

うかがふに——調べてみると。

巨魁——首領。

a 祇園精舎の鐘の音は、ものみなとどまることなき真理を伝
えて鳴る。釈迦命終の折、白く咲き変じたという沙羅双樹の
花の色は、いかなる勢い盛んな者も必ず衰えるという道理を
あらわしている。おごれる人も長くはなく、ただ春の夜の夢
のようにはかない。勢い猛々しき者もついに滅びてしまふ、
それはさながら風の前におかれた塵にひとしい。

b おごりたかぶる心も、猛々しき振る舞いも、皆、それぞれ
にあつたけれども、ごく最近のこととしては、六波羅の入道
前太政大臣平朝臣清盛公と申した人のありさまこそ、伝
え聞くにつけても、そのおごり、猛々しき振る舞いは、想像
を超え、言葉にもあらわしがたい。

(栃木孝惟「平家物語」による)

(問1) 祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響きあり。沙羅双樹の花

の色、盛者必衰のことわりをあらはす。とあるが、「祇園精舎の鐘の聲」と「沙羅双樹の花の色」、「諸行無常の響きあり」と「盛者必衰のことわりをあらはす」は、それぞれの部分の意味や組み立てが対応する表現となっている。これらと同じように、(1) ひとへに風の前の塵に同じに対応する部分を、「平家物語」の原文Aの中からそのまま抜き出して書け。

〔問2〕 (2) あの名文にすぐ続いて内外の無常の実例が挙げられるのですが、しかしそれらは、これから『平家物語』の中心人物としてその実体を論じようとする平家の棟梁、巨大な平清盛という人物像をもつばらクロスアップするための材料なのです。とあるが、「平家物語」の原文Bには、「内外の無常の実例」として挙げられている人々と平清盛とに共通する特徴が二つ示されている。それらの特徴がうかがえる二つの語句を、原文Bの中からそれぞれ五字以内でそのまま抜き出して書け。

〔問3〕 (3) その巨人の実体をこれからつぶさに書いてやるぞ、とあるが、ここでいう「つぶさに」の意味に最も近いのは、次のうちではどれか。

ア 大胆に イ こと細かに

ウ 順序正しく エ 工夫をこらして

〔問4〕 (4) 良くないものであったかも知れぬ。「で」と同じ意味・用法のものを、次の各文の——をつけた「で」のうちから選べ。

ア 高原に吹く風は、さわやかでこちよい。

イ 宿題を早く終えたので、夜はのんびりと過ごした。

ウ 毎日早起きするのは、それほど難しいことではない。

エ 私の住む町では、一年を通してさまざまな行事が催される。

〔問5〕 (5) もちろんとあるが、この言葉が直接かかるのは、次のうちのどれか。

ア 『平家物語』の
いろいろな角度が
イ 読み方には
エ あるはずです

国語

1	(1) 挑んで	(2) 閲覧	(3) 周到	(4) 丁寧	(5) 朗らかな
---	---------	--------	--------	--------	----------

2	(1) オサナイ	(2) ツげる	(3) ジシヤク	(4) コウカイ	(5) キュウユ
---	----------	---------	----------	----------	----------

3	問1	問2	問3	問4	25
	問5				

4	問1	問2	問3	問4	問5	25
	(a)				(b)	100
						200

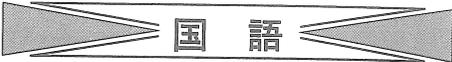
5	問1				
	問2				
問3	問4	問5			

得点	
----	--

受検番号	
------	--

1 (計10点)		2 (計10点)		3 (計25点)		4 (計30点)		5 (計25点)	
(1)	2点	(2)	2点	(3)	2点	(4)	2点	(5)	2点
(2)	2点	(3)	2点	(4)	2点	(5)	2点	問1	5点
(3)	2点	(4)	2点	(5)	2点	問2	5点	問2	5点
(4)	2点	(5)	2点	問3	5点	問3	5点	問3	5点
(5)	2点	問4	5点	問4	5点	問4	5点	問4	5点
問5	5点								

配点



解答

- ① (1) いど (2) えつらん
(3) しゅうとう (4) ていねい
(5) ほか
- ② (1) 幼 (2) 告 (3) 磁石 (4) 航海
(5) 給油
- ③ [問1] ア [問2] ウ
[問3] エ [問4] イ
[問5] (省略)
- ④ [問1] (a) 公益的機能
(b) レクリエーション機能
[問2] ウ [問3] ア
[問4] イ [問5] (省略)
- ⑤ [問1] ただ春の夜の夢のごとし
[問2] おごれる心、たけき事
[問3] イ [問4] ウ
[問5] エ

① [漢字の読み]

(1)音読みは「挑戦」の「チョウ」。 (2)書物などを調べながら見ること。 (3)行き届いて手ぬかりのないこと。 (4)「丁」には「チョウ」という音読みもある。 (5)音読みは「朗読」の「ロウ」。

② [漢字の書き取り]

(1)音読みは「幼稚園」の「ヨウ」。 (2)音読みは「告白」の「コク」。 (3)「磁」には、「青磁」などのように、せとものという意味がある。 (4)船で海をわたること。 (5)油を補給すること。

③ [小説の読解] 出典；大野哲郎『フクラスズメ』。

[問1] <表現の理解>入院している母をもつ裕之にとって、たとえガの命であってもそれは救わなければならない尊いものであった。しかし、自分がフクラスズメを救った理由を、晃からはガの標本のためだと思われてしまった。真意の伝わらないもどかしさもあって、自分の気持ちを伝えようと、つい語気が荒くなったのである。

[問2] <情景の把握>晃は、裕之の医師になりたいという発言や、神社の森まで来てほしいという発言の真意も理解できないでいる。しかし、晃が「思わず」承知してしまうほど、裕之の態度は真剣だったのである。

[問3] <心情の理解>裕之が「何か目に見えな

いものに必死に」願っているのは、フクラスズメのためにできる限りのことはしてやったが、その命が救われるという確信がまだもてなかったためである。羽をふるわせていたフクラスズメの様子が、ガンで入院している母の姿に重なり、何としても助かってほしいという思いが、このような行動となって表れたのである。

〔問4〕<文章内容の理解>裕之は、フクラスズメのことから、ガンで入院している母のことに一気に話題を転換している。「必死で自分を抑え」ながらも語り出す裕之であったが、母をどうしても自分の手で救ってやりたいという、今までだれにも話せなかった強い思いを、友人である晃にはわかってもらいたかったのである。

〔問5〕<主題の把握>裕之は、母を助けたいという気持ちをむやみに募らせているのではない。母が死ぬかもしれないという現実を直視したうえで、医師になって自分の手で救おうと決意しているのである。最後の「西風がうなりを立てて吹き過ぎていった／これからきびしい冬が来る」という表現は、裕之がこれから直面する困難を象徴しているといえる。単に裕之に同情する言葉をかけるだけではなく、その多くの困難を乗り越えられるような激励の言葉が適切であろう。

④〔論説文の読解—自然科学的分野—自然〕出典；北村昌美『ブナの森と生きる』。

<本文の概要>最近、ブナ林に対する価値判断の基準が多様化され、高く評価されつつあるが経済的な視点に立った有用性など人間を中心にした価値判断がいまだにその根本にある。日本人は科学思想の導入によって、かつてもっていた人間と自然の親和的一体感を失ってしまったが、今こそ人間は、人間が自然の支配者であるという思想から脱却しなければならない。人間は生態系の一員であるという自覚をもち、自然に対して謙虚な気持ちをもつことが大切である。

〔問1〕<文章内容の理解>最初は、ブナ林を木材資源として加工などに活用する「有形の効用」が判断の基準であったが、次いでブナ林の「公益的機能」に関心が集まるようになった。その後、価値判断の基準は多様化するが、特に、ブナ林の快適さや神秘さによる「レクリエーション機能」が重視され、さらに、ブナ林の生態系としての価値から「文化的機能」にも注目が集まったのである。

〔問2〕<文章内容の理解>筆者は「人間中心の観点からみた場合の有用性というものから脱却しなければならない」と述べている。なぜなら、

人間にとっての有用性とは、「経済的な視点」つまり、「森林の効用を金額に換算」することにかかわるからである。筆者は「だれのために、どう役立つか」ということよりも、「自然というものの本質に迫ってみる」ことの重要性を説いているのである。

〔問3〕<文章内容の理解>本来、日本人の自然観は、自然を「他者」とはみず、人間と自然を「一体」のものとしてとらえていた。このような自然観をもっている日本人だからこそ、「人間を自然の支配者と位置付けた西欧の思想」から脱却できると、筆者は考えているのである。

〔問4〕<文脈の把握>人間は「自然保護」という言葉を使って、強者である人間が弱者である自然を保護するかのようになっているが、筆者は「保護されているのは人間」だと述べている。そのような謙虚な姿勢なしに「自然保護」や「自然との共存」は成立しないのである。

〔問5〕<作文>筆者は、「有用なものだけに目を向け」るような自然に対する人間の態度を批判し、さらには「生態系の一員である自分を自覚する」ような「謙虚な気持ちをもつこと」が大切だと説いている。この意見をふまえたうえで、人間が自然とどうかかわっていくべきなのかということをもとめてみよう。

⑤〔説明文の読解—芸術・文学・言語学的分野—文学〕出典；木下順二『“劇的”とは』。

〔問1〕<古文の内容理解>連続する二文の主部と主部、述部と述部のように、文の成分それぞれが同じような形式になっているのを対句表現という。現代語訳aでは、「おごれる人も」と「猛々しき者も」が、「長くはなく」と「ついには滅びてしまう」が、「ただ春の夜の夢のようにはかない」と「それはさながら風の前におかれた塵にひとしい」が対応している。

〔問2〕<古語の意味>現代語訳bには、「おごりたかぶる心」と「猛々しき振る舞い」は皆もっていたけれども、平清盛の「おごり」と「猛々しき振る舞い」は想像を超えていたとある。

〔問3〕<語句の意味>細かく、詳しいこと。平家物語の作者が、平清盛の「おごり」や「猛々しき振る舞い」などの実体を詳細に書こうという意志をもっていたようだという事。

〔問4〕<品詞の識別>断定の助動詞「だ」の連用形。アは形容動詞の連用形の活用語尾、イは接続助詞「ので」の一部、エは格助詞。

〔問5〕<文の組み立て>「もちろん」は、論ずる必要もないほど当然だ、という意味なので「あはらずです」という表現にかかる。